

アートによる難民支援——シドニーでの活動事例を中心に

飯笹佐代子 (青山学院大学 総合文化政策学部)

はじめに

世界の難民をめぐる状況がますます深刻化の様相を呈している近年、その窮状を社会に訴えるアート作品の創作や、非人道的な難民政策を問題視するアーティストらによる抗議活動が注目されている。難民キャンプや収容施設に留めおかれた難民/庇護希望者が、収容の実態を創作活動によって外部に告発し、抗議の意を示す事例も少なくない。これまで筆者は主にこうした事例に関心を寄せてきた (飯笹 2020; 2021; 2023; 2024a; 2025)。

他方、かねてより、難民が受け入れ社会に定住する過程で、自身のトラウマからの回復やエンパワーメント (主体性の回復) などに資するアート活動の役割が重視されてきた。先行研究においても、芸術表現が自尊心を促進して感情表現を容易にし、トラウマ体験を乗り越える上で、重要なツールとなり得ること、さらにはアート活動が移民や難民の身体的、精神的、情緒的な健康を向上させ、社会統合を促進することが示されている¹。これらの研究は欧州の事例、あるいはアートセラピーにおける実践例に着目したものが圧倒的に多い。オーストラリアに関しては、先進諸国の中でも難民・移民の受け入れに関して顕著な実績を持ち、定住支援に関する研究も豊富ではあるが、アートセラピー関連の研究を除くとアート活動の動向を体系的に論じた研究は稀である。とりわけ日本では、同国のアートによる難民支援の存在自体、それほど知られていないのではないだろうか。

アートによる難民・移民支援活動について各国の事例を俯瞰的に考察した希少な文献として、主に EU 諸国を対象とした調査報告書 *The Role of Culture and the Arts in the Integration of Refugees and Migrants* がある。この調査では EU 諸国における 90 件以上の取り組み事例とともに、EU 以外ではアメリカのピッツバーグとオーストラリアのシドニーの事例がそれぞれ 1 つずつ紹介されている。後者の事例が筆者の注目する、シドニーの非営利コミュニティアート団体「難民アートプロジェクト (Refugee Art Project)」の取り組みである。オーストラリアでは他にもアートによる難民支援のさまざまな取り組みが各地で行われている。本稿では「難民アートプロジェクト」はじめシドニーにおける難民とアートをめぐる動向について、主に 2025 年 3 月の現地調査を踏まえながら報告する。

なお、本稿では「難民」を何らかの事情で祖国から逃れてきた人たちとして幅広く捉えることとし、文脈によっては庇護希望者と、すでに難民として認定された「難民」とを区別する。また、「アート」は絵画、インスタレーション、物語や詩、映像、音楽、演劇、パフォーマンス等の様々な創作的営為を含むが、本稿ではヴィジュアル・アート関連の活動が中心となる。

¹ 世界保健機構 (WHO) は、音楽、文学・執筆、演劇・ダンス、視覚芸術・参加型アートの 4 つの分類ごとに、それぞれが難民などの強制移住を余儀なくされた人たちの精神の健康にどのような効果があるのかについて、38 の文献に基づき整理している (World Health Organization 2022)。また、Kate Phillips が執筆した、イギリスにおけるヴィジュアルアート活動と難民の健康に関する博士論文からも、多くの先行文献を確認することができる (Philips 2019)。

1. 「難民アートプロジェクト」

収容所内でのワークショップから開始

「難民アートプロジェクト（Refugee Art Project）」は、2010年10月にアーティストや学者らによって立ち上げられたシドニーの非営利団体である²。現在も主宰者として中心的な役割を果たしている Safdar Ahmed は、アーティスト、作家、ミュージシャンとして活躍する。またシドニー大学に提出した博士論文を *Reform and Modernity in Islam* (Ahmed 2013) として出版した研究者でもある³。彼は、アートの本質を表現や意見の多様性を育む民主的なものとして捉え、難民にとってのアート活動の意義を、自身の窮状から避難できる場を提供するとともに、作品を通じて自身の体験を社会に伝え、さらには自身が社会とつながることにあるとする。

同プロジェクトの目的は当初、オーストラリアの収容所に無期限で収容されている庇護希望者/難民をアート活動によって支援するためであった。オーストラリアでは1992年より全ての非合法入国者に対して強制収容措置（mandatory detention）がとられており、庇護希望者の多くも収容対象とされる。収容所への立ち入りは制限され、カメラ、携帯電話の持ち込み、またほとんどのジャーナリストの立ち入りも禁止されている。こうした状況の中で収容者が公の場で発言する機会を奪われていることを懸念し、かれらの自己表現の機会を提供するために、Ahmedらはシドニー郊外のヴィラウッド入国管理収容所（写真1）において定期的なアートワークショップを開始した。ここに収容されている人々のほとんどは、最初の難民認定申請が却下されて不服を申し立て、再審査を待つという長い苦悩に満ちたプロセスに巻き込まれていた（Ahmed 2011: 10）。このAhmedらの試みは、オーストラリアにおけるアートを通じた各種の難民支援活動の中でも収容所内に向かいに行くという点で特殊な事例と言える。



写真1 左：フェンスに厳重に囲まれたヴィラウッド入国管理収容所。右：この敷地内への不法侵入は刑法で禁じられているとの政府による警告（2023年9月筆者撮影）

² 「難民アートプロジェクト」に関する以下の記述は、特に出典を明記しない限り、Refugee Art Projectの公式ウェブサイト <https://therefugeeartproject.com/home> および Ahmed 氏の講演（Ahmed 2012）を参照した。

³ 創設者のメンバーとして、他には哲学者で人権活動家の Omid Tofghian、文化理論やアートの研究者 Bilquis Ghani がいる。

2013年2月以降は、シドニー西部のノースパラマッタ（North Parramatta）やアッシュフィールド（Ashfield）のスタジオで、難民出身者なら誰でも参加できるアートワークショップやイベントを開催してきた。創作活動はドローイング、油彩画、アクリル画、写真、ビデオ、コンピューター・アート、レディメイドなど多様であり、参加者の出身はアフガニスタン、スリランカ、イラク、イラン、シリア、中東のクルド地域、ミャンマーなど多岐にわたる。かれらの多くは収容された経験を持ち、中には収容期間が5、6年という長期間に及ぶ人たちもいるという。

同プロジェクトの活動は、オーストラリア政府が国外に設置したナウルやパプア・ニューギニアのマヌス島の収容所⁴に拘留中ないしは拘留経験のある庇護希望者/難民に加えて、多様な出自を持つ人々にも開かれた形で広がっていった。また、アート活動の目的は必ずしも難民の課題を提起することだけにこだわっているわけではない。それでも「難民アートプロジェクト」として名称に「難民」を掲げるのは、経済的に恵まれず地域社会の支援にアクセスする機会にも乏しい庇護希望者や難民出身者に存在を知ってもらうためには効果的であるからだという（Antoniou and Ahmed 2023: 197）。

収容所で考案されたコーヒー・ペインティング

収容所では絵を描きたくとも画材を入手できるとは限らない。注目に値するのは、ヴィラウッド入国管理収容所の収容者たちが絵を描くために行った創意工夫についてである。例えば、アーティストで発明家のMajid Rabetは、収容所に入入りしていた猫から毛を集め、テレビのアンテナを使って絵筆を作ったという（ただし、毛を集める過程で決して猫を傷つけたわけではないことを付記しておきたい）。また、芸術に多少の知識があったイラク人の収容者は、絵の具の代わりにインスタントコーヒーの粉を水で薄めて描くことを考案した。この技法は、「コーヒー・ペインティング」として同収容所で受け継がれただけでなく、後述するように、収容経験のないアーティストも取り入れている。

以下の2つの作品は、ヴィラウッド入国管理収容所に5年間拘留されていたインドネシア出身のAlwy Fadhelによって描かれたものである。目は収容所の厳格な監視を表しているのだろうか。収容者が直面する苦難や、自由への渴望が伝わってくる⁵。

⁴ オーストラリアでは2001年より、難民申請のために密航船で豪領土に上陸を試みる、いわゆるボートピープルを南太平洋のナウル共和国やパプア・ニューギニア（PNG）のマヌス島に移送して現地で収容し難民認定審査を行う政策（「パシフィック戦略（Pacific Strategy）」と呼ばれる）を行っている。2008年に中断されたが、ボートピープルが増えたために2012年に再開された。なお、マヌス島の収容所はPNGの最高裁判所により憲法違反とされ、2017年に閉鎖された。詳しくは、飯笹 2024b を参照。

⁵ その他の作品は、<http://www.therefugeartproject.com> のコーヒー・ペインティング・ギャラリーを参照。



左 : Alwy Fadhel, *Bound*, coffee on paper (Refugee Art Project)

右 : Alwy Fadhel, *Fantasy*, coffee on paper (Refugee Art Project)

「難民アートプロジェクト」の目的

「難民アートプロジェクト」が目指すものは複合的である。

まず、これまでアートについて経験がなくとも、アートは収容者にとって自己表現の重要な手段となる。アートを通じて言葉化の困難な極めて個人的なテーマを表現することができ、それは過去のトラウマの克服に向けた一歩となり得る。また、アート制作は、その作業に没頭することで、リラクゼーション効果をもたらす手段ともなる。加えて重要なのは、ワークショップ自体が交流の場として庇護希望者/難民の孤立を防ぐ役割を果たしていることだ。

それらにとどまらず、かれらの作品は一般公開の展覧会や、小冊子 (zine と呼ばれる) 等の出版物を通じて公開され、難民の多様な声や意見、自己表現、芸術作品をオーストラリア社会に伝えることを目指す。展覧会では、難民の生活の特徴づけるトラウマ、亡命、希望、忍耐という共通のテーマで描かれた絵が展示される。主宰者の Ahmed の狙いは、それらが政治やメディアによって誘導された庇護希望者/難民の否定的なイメージとは異なるオルターナティブを提供し、また、自国の収容政策の実態を知らしめることである。Ahmed はこれを、教育的役割と表現する。さらに、一般社会から隔離された収容者自身は展覧会に参加できないとしても、作品が SNS で紹介されることによって社会とのつながりが生まれる。このように、難民アートプロジェクトは、庇護希望者/難民がアートを媒介に自らの声で一般の人々に窮状を伝えることを可能にし、それによってかれらと社会を架橋することができるのだ。

展覧会は地元のギャラリー (少なくとも 2017 年までに 25 回以上) に加えて、ウィーンでも開催され一般公開された。また、2014 年のシドニー・ビエンナーレではヨーロッパからの参加アーティストらと「難民アートプロジェクト」グループとのコラボレーションによるインスタレーションが⁶、2016 年にはシドニー現代美術館で開催された *Telling Tales: Excursions in Narrative Form*

⁶ Libia Castro と Olafur Olafsson による *Bosbolobosboco #6 (Departure-Transit-Arrival)* と題する作品で、奇妙な形をした 2 つのシートがあり、そこに身体を横たえ、ポートピープルが収容所に到着するまでの体験を証言する音声をヘッドホンから聴くことができる。なお、このシドニー・ビエンナーレではメインスポンサー企業の子会社が国外収容所の運営業務を巨額の契約金でオーストラリア政府から受託していたことに対して、参加アーティストらによるボイコット運動が起こった。詳しくは、飯笹 2020 を参照。

展に同プロジェクトメンバーの絵画が展示された。

活動の財源は主として寄付に拠っており、展覧会等のイベントについては他の組織と共催したり、公的助成の提供を受けることもある。Ahmed は後述するように、自身のアート活動においてオーストラリア政府の難民収容政策に対する批判的姿勢を強く打ち出している。そのことと公的助成との関連について筆者が質問すると、展覧会などのイベントへの公的支援は少額ながらも申請すれば比較的容易に得られること、なぜならば、その審査の決定権はアートの専門家であり、政府は一切口を出すことはないからであると返答した⁷。

なお、展覧会における作品の販売収益は全額、それを描いた庇護希望者/難民に支給され、多くの場合かれらがやむを得ず残してきた家族を支援するために送金されるという。

サーニングビラでのワークショップ

筆者は2025年3月に、シドニー郊外のアッシュフィールドにあるサーニングビラ（Thirning Villa）で、基本的に毎週土曜日に開催されている「難民アートプロジェクト」のワークショップに参加することができた。サーニングビラは1860年代に建てられ、2003年に元の姿に修復された歴史的建造物で、インナー・ウェスト（Inner West）市が管理し、アーティストの宿泊施設ともなっている（写真2）。

参加人数は日によって多い時も少ない時もあるとのことだが、筆者が訪問した日は主宰者のAhmedはじめ、イランやエジプト、ガーナなど異なる出身の6名ほどが集まり、談笑しつつ、各自が思い思いにコミックや絵を描いていた。同プロジェクトは当初、収容された庇護希望者/難民のための活動として始まったが、先述したように、難民に限らず多様な出自の人々にも開かれており、和気藹々とした創造的な場という雰囲気であった。



写真2 左：サーニングビラの外観。中央：1階の部屋の扉。右：1階の広い部屋はギャラリーとなっており、ワークショップは2階の部屋で行われていた（2025年3月筆者撮影）

この日の参加者の1人、10年前にガーナから移住してきた Emmanuel Asante は新進気鋭のヴィジュアル・アーティストで、若者に美術を教えたり、コミュニティ・アートの分野で活躍している。写真3は Blacktown の Max Weber Library で展示されていた彼の作品だが、「コーヒー・ペイ

⁷ 2024年3月、シドニーでの聞き取りによる。

ンティング」の技法を用いて描くこともある。彼にとって Ahmed は絵を教わった恩師の 1 人であり、「コーヒー・ペインティング」もここでのワークショップで習得したという (Creative Australia 2025)。

Asante は、2024 年のクリエイティブ・オーストラリア・アワード (Creative Australia Award) で、コミュニティ・アートおよび文化発展の分野における若手キャリア賞を受賞した。難民、移民など文化・言語的に多様な人々やハンディを抱える若者向けの美術クラスやワークショップ・プログラムの運営に関する彼の貢献が評価されたものである (Creative Australia 2025)。

別の参加者 Zeinab Mir はイラン出身のコミックを得意とするアーティストで、アイデンティティ、故郷喪失、個人史をテーマに作品を制作している。2015 年から「難民アートプロジェクト」に加わり、ワークショップのファシリテータも務めている。同プロジェクトの冊子として刊行された *Zeinab* (画像 1) には、彼女が祖国で経験した爆撃や地方への租界、来豪後のシドニーでの暮らしと困難などがコミックで描かれている。その序文で記されているように、コミックは「誰でもがアクセスでき、また創作を試みることのできる民主的なアートの形」であると彼女は言う。2022 年のドイツで開催されたドクメンタ 15 では、グループ展で作品を展示した。

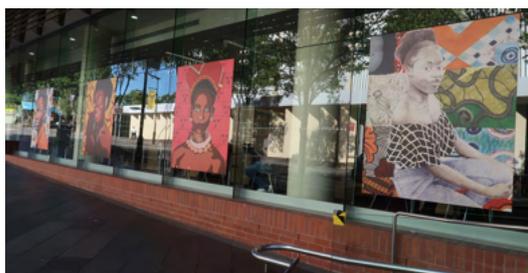
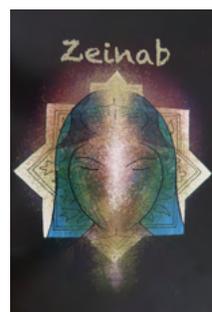


写真 3 Asante の描いた絵画 (2025 年 3 月筆者撮影)



画像 1 Zeinab Mir が Refugee Art Project の冊子 (zine) として作成したコミックの表紙

この日のワークショップでは収容経験者や直近に来豪した庇護希望者/難民に会うことができなかったが、2020 年に Diversity Arts Australia による難民出身アーティストを対象とした Stories from the Future project に「難民アートプロジェクト」が協力してこの場所で開催されたワークショップではさまざまな人たちが集っており、その様子はウェブ上で公開された動画で見ることができる⁸。なお、Diversity Arts Australia とは、シドニー郊外のパラマタ (Parramatta) を拠点に、芸術、文化、クリエイティブ産業における民族文化および移民の人種的平等を推進するために、政府や自治体、大学等から資金の提供を受けて調査や提言、各種プロジェクトを実施する全国的な組織である⁹。

⁸ https://youtu.be/mlBmE_ahTU4

⁹ <https://diversityarts.org.au/about/>

2. 難民アーティストのキャリア支援

今回のシドニーでの調査における新たな発見は、「難民アートプロジェクト」がそうであるように、アートを活用した難民支援のみならず、難民出身のアーティストに対するキャリア支援も重視されていたことである。以下、関連の活動をみていきたい。

Beyond borders exhibition

Settlement Services International (以下、SSI)は2000年にNSW Migrant Resource Centre Associationとして発足し、2003年に今の名称となった。移住・難民の定住支援を中心に全てのオーストラリア人を対象として、雇用や教育、福祉などの幅広い分野における支援活動を行う非営利団体で、アートに関するプログラムやイベント開催も手掛けている。Beyond borders exhibitionは、プロもしくはプロを目指す難民アーティストのキャリア開発とオーストラリアでの人脈形成を支援するCreative Compass program活動の一環として企画され、2024年12月から開催されている。会場はシドニー中心部の地下鉄マーチン・プレイス（Martin Place）駅の地下コンコースの一面に設けられ、そこを通る人は誰でもガラス越しに作品を見ることができる（写真4）。



写真4 Beyond borders exhibition、Martin Place 駅の地下コンコースで（2025年3月筆者撮影）

参加アーティストたちの来歴

SSIの公式ウェブサイト上で「難民のアーティストにとって、創作活動は単なる職業ではなく、過去の経験と新たな可能性を結びつける命綱である」と謳われるこの展覧会には、近年来豪したばかりの計16人が出展している。出身国はアフガニスタンが9人、ミャンマーとシリアが各2人、イラク、コンゴ、ウクライナが各1人で、中にはすでに顕著な実績を有する著名なアーティストもいる¹⁰。

¹⁰<https://www.ssi.org.au/beyond-borders-art-by-refugee-artists/>. 以下の参加アーティストに関する情報もこれに基づく。

Muhammad Akbar Farhad は木画、細密画、輪郭画、カリグラフィーなどの素材や技法を用いて、アフガニスタンの人々や風景を描くプロの画家である。1971 年、アフガニスタンのカブールで生まれ、1992 年に医学部を卒業後、働きながら美術を学び、1996 年、アフガニスタンの内戦のためパキスタンに逃れた。2018 年にはインドに移住し、現在は家族と共にシドニーで暮らしている。これまでに 2500 点の美術作品を制作し、パキスタン、インド、オーストラリアの 24 のギャラリーで展覧会を行い、権威ある賞を獲得している。

1994 年にアフガニスタンで生まれ、イランの複数の美術学校で学んだ Maryam Hosseiny は、人権、特に女性の権利をテーマに、祖国の伝統的な細密画も踏襲しつつ、例えばアフガニスタンに女性の権利など存在しないことを表現したメッセージ性のある絵画を描く。イランの作品公募展で幾度も 1 位となり、同国の文化芸術省の後援により、イランのシャリアール市で難民アーティスト・ワーキング・グループを率いた経験も持つ。来豪後も、2024 年の世界難民の日パラマタのニューサウスウェールズ警察署本部で開催された展覧会ははじめ、すでに多くの場で作品が紹介されている。

なお、警察署での展覧会の開催は日本では意外に思われるかもしれないが、ニューサウスウェールズ (NSW) 州では警察が多様性を尊重しつつ地域社会に貢献する姿勢をアピールする一環として、こうした取り組みが行われている。特に、多くの難民にとって祖国の警察は体制側の弾圧に加担する存在であったため、警察に対する脅威や不信感を払拭することが地域社会の安全にとっても不可欠だからだ¹¹。

話を Beyond borders exhibition に戻すと、上述の 2 人のアーティストは美術教育を受けているが、そうした機会もなく独学で学んだ難民アーティストも少なくない。2006 年にコンゴ民主共和国のゴマで生まれた Ezra Mukendi はマラウイの難民キャンプで 10 年近くを過ごし、そこでリアリズムと抽象芸術を融合させることへの情熱と才能を育んだという。やがて、マラウイで事業主のために壁画を描く仕事を依頼されるようになった。自由、人権、平等などをテーマとした作品を描いており、来豪後の最初の展覧会はパラマタの警察本部で開催された。

シリアで生まれ、イラクとトルコでの生活を経て来豪した Melak Al-derwish も独学で学んだアーティストだ。2005 年生まれ彼女はシリアで戦争が始まった 6 歳の頃から絵筆に親しみ、戦争の絵を描きながら育った。鉛筆や木炭を使い、過去を題材にした作品では紙をお茶に浸して描くこともある。現在は戦争によって故郷を追われた一般市民の心情を探求する作品などを制作している。

Beyond Borders exhibition では、以上の 4 人を含む計 16 人によって制作された 43 の作品にそれぞれ 250 豪ドルから 2500 豪ドルまでの値段が付けられて販売されている。同展覧会のウェブサイ

¹¹ そのための方策の一つとして、ニューサウスウェールズ州警察では警察とコミュニティとの橋渡しを行う「多文化コミュニティ連絡調整官 (multicultural community liaison officer)」という専門家が雇用されている。昨年の UNHCR 難民映画祭で上映され、本学総合文化政策学部の「映像翻訳ラボ」の履修生が字幕制作を行ったドキュメンタリー映画『孤立からつながりへ ～ローズマリーの流儀～』の主演ローズマリーは、この職務でパラマタの警察署に勤務する。なお、監督のロース・ホーリン氏とは本年 3 月のシドニー滞在中に会う機会を得て、実り多い意見交換を行うことができた。

ト上でのカタログリストによると、2025年3月30日時点で11点が販売済みとなっている。

難民アーティスト育成プログラム

難民アーティストの支援については、シドニー南西部を拠点にコミュニティの文化的多様性に根差したマルチ・アート活動を展開する CuriousWorks の取り組みも興味深い。CuriousWorks は、2005年に西シドニー出身の若いスリランカ人アーティストによって、多様なコミュニティのストーリーを伝えることを使命に創設されたアート団体である。運営資金は、Creative Australia、Create NSW¹²、地元自治体などから提供され、多様な参加型アート活動を行っている¹³。

同団体による「難民アーティスト育成プログラム（Refugee Artist Development Program）」は、新たに到着した難民出身のクリエイターがNSW州のクリエイティブ産業で活躍できるように支援することを目的に、2021年から03まで実施された。作品の創作、指導、雇用、教育に重点を置き、イベントでの作品の公表に加えて、プログラム参加者には有給の仕事やオン・ザ・ジョブ・トレーニングの機会なども提供された¹⁴。

2003年6月には「世界難民の日」に因んで Homelands Regional Arts Tour というイベントを、上述の SSI と協働しながら実施した¹⁵。これはアートやストーリーテリングなどの活動を通じて難民の経験に対する認識と理解を深め、社会の融和を促進することを目的に、アーティストたちがオーストラリア東海岸を横断しながら作品を披露するという企画である。CuriousWorks による「難民アーティスト育成プログラム」の参加者もパフォーマンスなどの作品を披露した¹⁶。

マヌス島に収容されていたアーティスト Mostafa Azimitabar

さて、難民アーティストとして、近年のオーストラリア美術界でもっとも注目を集めた1人が、イラン出身のクルド人 Mostafa Azimitabar だろう。アーチボルド賞（Archibald Prize）というオーストラリアの栄えある賞の最終選考まで2回も残ったからだ。

アーチボルド賞とは、*The Bulletin* 誌の創設者で1919年に亡くなった故 J. F. アーチボルドの遺言に従い、毎年、オセアニア在住のアーティストが描いた「芸術、文学、科学、政治の分野で著名

¹² Creative Australia はオーストラリア連邦政府の、Create NSW はニューサウスウェールズ州政府の機関で、主に文化・芸術領域の事業に助成を行う。

¹³ <https://curiousworks.com.au> を参照。

¹⁴ <https://curiousworks.com.au/programs/refugee-artist-development-program/> を参照

¹⁵ なお、「世界難民の日」を記念して毎年6月の難民週間にオーストラリア各地でさまざまなアート関連イベントが開催されており、難民受け入れ数が大都市に比べて少ないタスマニア州の州都ホバートにおいても2004年に Refugee Week Art Exhibition が行われた。難民週間のアートイベントについては紙幅の都合により稿を改めたい。

¹⁶ <https://curiousworks.com.au/2023/07/travelling-with-homelands-tour-2023/> を参照。

な男性または女性の肖像画」の中から、最も優れた作品を顕彰するものである。賞金は 10 万豪ドルで、受賞作と最終選考に残った作品は一定期間、シドニーのニューサウスウェールズ州立美術館 (Art Gallery of New South Wales) に展示される¹⁷。

Azimitabar は 1986 年にクルド系としてイランで生まれ、迫害を逃れて 2013 年に密航船でオーストラリアに到着後、クリスマス島を経て、パプア・ニューギニアのマヌス島に収容された。PTSD と喘息により慢性的な体調不良に陥ったため、マヌスに収容されてから 6 年半後に当時の医療措置法によりメルボルンに搬送され、2021 年に釈放されるまでホテルで拘禁生活を余儀なくされた¹⁸ (Salmon, 2024)。

マヌス島の収容所では画材の使用が許されなかったため、歯ブラシとコーヒーを使って描くようになり、今でもそのスタイルを継続している。2022 年には自画像の *KNS088*¹⁹ が、2024 年には Angus McDonald の肖像画²⁰ がアーチボルド (Archibald) 賞の最終選考まで残った。*KNS088* とは、計 8 年に及ぶ収容中に名前の代わりに呼ばれていた彼の識別番号である。この絵は、収容中に持っていた唯一のアクリル絵の具にコーヒーを混ぜて描かれたという。他方、肖像画に描かれた Angus McDonald はヴィジュアル・アーティスト、難民支援活動家、コラムニスト、ドキュメンタリー映画製作者として活躍しており、収容中から Azimitabar を支援した 1 人でもある。アーチボルド賞への応募を勧め、自画像 *KNS088* はマクドナルドの制作スタジオで描かれたという²¹。マクドナルドの活動については後述する。

現在 Azimitabar は、ミュージシャン、作家、そして人権活動家としてシドニーで活躍している。しかしながら、6 か月ごとに更新しなければならない仮滞在ビザ (bridging visa) しか付与されていないため、極めて不安定な生活状態であることを 2024 年 11 月時点で自ら告白している²² (Azimitabar 2024)。

3. 収容政策に抗議するアクティビストとしての創作活動

「難民アートプロジェクト」を率いる Safdar Ahmed は、難民アーティストを支援しながら、同時にアクティビストとして収容された難民の窮状をオーストラリア社会に告発し、政府の難民収容政策に抗議するために、さまざまなアート活動を展開している。前述の Azimitabar の支援者であ

¹⁷ アーチボルド賞については、<https://www.artgallery.nsw.gov.au/art/prizes/archibald/>を参照。

¹⁸ オーストラリアではホテルが学校、軍の兵舎などとともに「代替収容施設」として位置付けられ、ナウルやマヌス島の収容施設から治療のためにオーストラリア本土に搬送された庇護希望者や難民たちが収容された (飯笹 2024a)。

¹⁹ 自画像とその説明は <https://www.artgallery.nsw.gov.au/prizes/archibald/2022/30409/>を参照。

²⁰ 肖像画とその説明は <https://www.artgallery.nsw.gov.au/prizes/archibald/2024/30632/>を参照。

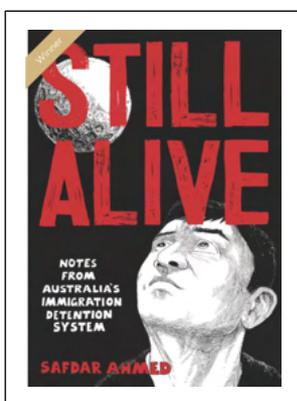
²¹ 同上。

²² NSW 州立美術館で彼がガイドの仕事をしていることがわかり、折をみて何回も足を運んだが会うことは叶わなかった。

る Angus McDonald も同様である。ここでは、彼ら自身の創作活動に触れておきたい。

Safdar Ahmed の活動

Ahmed のグラフィックノベルとしてのデビュー作 *Still Alive* (2021) (画像2) は、ヴィラウッド入国管理収容所で開催したワークショップでの収容者たちとの出会いから生まれたものである。2015 年にオンラインで公開されたウェブコミック *Villawood: Notes from an immigration detention centre* を基に 5 年以上かけて作業を重ね、2021 年に Twelve Panels Press から刊行された。ヴィラウッドの収容所内の様子や、収容者の来豪までの苦難の軌跡、来豪以降の理不尽かつ非人道的な待遇と苦悩が、白黒の版画調の独特なスタイルで描かれている。本書はオーストラリア社会から隔絶された収容所内の状況、またそこで営まれている収容者の等身大の姿と個人史を社会に伝える貴重な証言記録であり、同時に収容政策への鮮烈な批判も込められている。



画像2 *Still Alive* の表紙

ページをめくると冒頭に、W. H. Auden が 1939 年に当時のナチスドイツから逃れるユダヤ人難民について書いた詩 'Refugee Blues' の一節が引用されている。

領事事はテーブルを叩いて言った。

「パスポートを持っていないなら、もう死んだも同然だ」

でも、私たちはまだ生きている。そう、私たちはまだ生きてる。

Still Alive は、Multicultural NSW Award はじめ、2022 年の Eve Pownall Award や Comic Arts Awards of Australia の Gold Ledger を授与され、2022 年 NSW 州首相文学賞の Book of the Year も獲得した。

Ahmed はまた、ミュージシャンとしてデスメタ・バンドを組み、オーストラリア政府の国外収容政策への抗議活動も行った。2022 年にドイツ・カーセルで開催されたドクメンタ 15 では、*Border Farce-Sovereign Murders-Alien Citizen* と題するビデオ・インスタレーションを含む 3 部から成る作品を公表し、帰属意識、表象の政治、国境の武器化 (weponisation) について批判的に問いかけた²³。*Border Farce* には、Ahmed の友人でマヌス島に 6 年間収容されていたクルド系イラン人のヘビーメタル・ギタリストが登場し、収容体験を伝えるドキュメンタリー的なストーリーと演奏、パフォーマンスが交錯するコラボレーション映像が展開される²⁴。

²³ <https://documenta-fifteen.de/en/lumbung-members-artists/safdar-ahmed/>

²⁴ <http://boundbaw.com/world-topics/articles/148>

Angus McDonald の活動

他方、Azimitabar がマヌス島に収容されていた頃から彼を支援してきた McDonald は、映画制作によって政府の難民政策に抗議の意を示してきた。2019 年に国外収容政策の実態を告発する短編映画 *Manus* を公開し (複数の賞を受賞)、2023 年には、Azimitabar ともう 1 人の収容仲間の拘留体験と解放後を追ったドキュメンタリー映画 *Freedom is Beautiful* を公開している。

さらに画家でもある彼は、ペフルーズ・ブチャーニーの肖像画を描き、2020 年のアーチボールド賞の最終選考まで残って People's Choice 賞に選ばれた²⁵。ブチャーニーはマヌス島に 6 年間以上収容された後、2020 年にニュージーランドに出国し、そこで難民認定されたイラン出身のクルド人である。収容中に監視の目をかいくぐって精力的に執筆や創作活動を行い、それらを限られたインターネットへのアクセスを通じて外部に発信し、過酷な収容への抗議を続けたことで国内外から注目を集めた (詳しくは、飯笹 2023; 2025 を参照)。彼の著書 *No Friend but the Mountains: Writing from Manus Prison* はオーストラリアで数々の賞を受賞し、2024 年に邦訳も刊行されている。McDonald にとって、ブチャーニーの肖像画を描き、アーチボールド賞に応募することは、それ自体が収容政策への抗議活動と言えるだろう。

結びに代えて

難民が直面する問題に対してアートが持ち得る意義や役割とは何か。本稿では、この問いへの考察の一助とすべく 2025 年 3 月に実施したシドニーでの調査において見聞し、関係者への意見聴取やそこから得た知見を基に、難民とアートをめぐる多様な活動の一端に光を当てた。それを踏まえつつ、今後の課題を示すことで本稿の結びの代わりとしたい。

・今回の調査では、「難民アートプロジェクト」以外にも、既存の難民・移民の定住支援組織やアート団体等によってアートを通じた様々な難民支援活動が行われていることを確認することができた。これら各組織・団体の目的と使命、難民支援におけるアートの捉え方、具体的プログラム、活動資金の調達方法、さらには活動の事後評価のあり方等について、メルボルンはじめオーストラリアの他地域も対象に調査を行い、アート活動による難民支援の動向を俯瞰的に把握することを試みたい。

・今回の調査で印象的だったのは、難民出身アーティストのキャリア支援が重視されるようになってきていることである。当事者による「難民アート」は社会に難民の窮状を知らしめる上で効果的であり、時に政府の難民収容政策を批判する強い政治的メッセージを発信し得る。その一方で、「難民アーティスト」というラベルを付されることの問題性も指摘されている。かれらを犠牲者の立場に固定化し、その作品はしばしば難民体験に関連するものとして本質化される傾向にあるからである (Antoniou and Ahmed 2023: 196)。こうした「難民アート」の効用と限界をどのように捉えるべ

²⁵ 肖像画と説明は、<https://www.artgallery.nsw.gov.au/prizes/archibald/2020/30229/>.

きなのか。「難民アートプロジェクト」が当初目指していた「アウトサイダー・アート」としてインパクトを持つ「難民アート」と、いわゆるプロの描くそれとの違いにも留意しつつ、政治ないしは芸術という観点から考察を加えたい。

・映像・メディア研究者の Olivia Khoo は、収容中の庇護希望者/難民にとってアートセラピー的なアート活動の役割を軽視すべきでないとしつつ、絵の作者である収容者という「他者」と、私たちを含むより広範な人々との出会いを媒介する上で果たし得るアートの役割をより重視する。そのことが直ちに社会変革につながることは難しいかもしれないが、作品が言語の障壁を超えて対話の機会を拓き、行動を生み出す可能性もある。さらに、こうした「他者」との出会いにおいて、私たちが、かれらをそうした状況に追い込んでいる「集団的責任」にいかに向き合うことができるのかを問いかける (Khoo 2017)。このことは同様に、難民当事者ではないアーティストが、難民をテーマに創作した作品に私たちがどう向き合うのか、という課題にもつながるだろう。アートと社会との関係性を検討する上で、避けて通ることのできない問いである。(2025 年 3 月 31 日提出)

謝辞

本稿は 2024 年度 ACL プロジェクト研究「難民とアート——創作活動による抵抗、出会いと交流、主体性の回復」の成果の一部である。2025 年 3 月に実施したシドニーでの調査にご協力くださった Refugee Art Project, Settlement Services International, Diversity Arts Australia をはじめとする関係者の方々、コーヒー・ペインティングの作品の転載を許可してくださった Safdar Ahmed 氏にお礼を申し上げます。また、本研究プロジェクトを支援くださった ACL の関係者各位に感謝申し上げます。

参考文献

- Ahmed, Safdar, 2011, “The Art of Exile”, *Literature and Aesthetics*, 21: 10-18.
- , 2012, “Art, Ingenuity and Refugees: Syed Safdar Ahmed at TEDxParramatta”, YouTube. 3 August, <https://www.youtube.com/watch?v=M7Wi8vqhze0>.
- , 2013, *Reform and Modernity in Islam: The Philosophical, Cultural and Political Discourses among Muslim Reformers*, London: IB Tauris.
- , 2021, *Still Alive: Notes from Australia’s Immigration Detention System*, Twelve Panels Press.
- Antoniou, Izabella, Safdar Ahmed, Tabz and Zee, 2023, “Fragmenting Australian Art: the Problem of Labelling ‘Refugee Art’”, Harwood, Tristen, Grace McQuilten and Anthony White (eds), *Variations: A More Diverse Picture of Contemporary Art*, Carlton, Victoria: Monash University Publishing.
- Azimitabar, Mostafa, 2024, “To Not Know if You Will Ever Be Safe Is Torture. Labor’s Deportation Laws are Cruel”, *The Guardian*, Nov. 28, <https://www.theguardian.com/australia>

news/commentisfree/2024/nov/28/labor-new-migration-bill-laws-comment-ntwnfb.

Boochani, Behrouse, 2018, *No Friend but the Mountains: Writing from Manus Prison*, Sydney: Pan Macmillan Australia (『山よりほかに友はなし——マヌス監獄を生きたあるクルド難民の物語』オミド・トフィギアン (英訳)、一谷智子・友永雄吾監修・監訳、明石書店、2024 年)。

Creative Australia, 2025, “Put Your Pain on the Canvas”: Emmanuel Asante on Learning and Teaching Art”, *Stories*, January 30, <https://creative.gov.au/news/stories/put-your-pain-on-the-canvas-emmanuel-asante-on-learning-and-teaching-art/>.

飯笹佐代子, 2020, 「シドニー・ビエンナーレ 2014 と国外難民収容政策——アーティストの抗議活動は何をもたらしたのか」(研究ノート)『青山総合文化政策学』11(1): 35-57.

———, 2021, 「難民危機と現代アート——アイウエイウエイの作品を中心に」『青山総合文化政策学』(研究ノート) 12(2):138-154.

———, 2023, 「マヌス島からの抵抗——収容されたクルド人難民ベフルーズ・ブーチャーニの創作活動とその影響」『青山総合文化政策学』14 (1): 1-28.

———, 2024a, 「パンデミック禍のオーストラリアで立ち現れた『境界』の諸相」飯笹佐代子・鎌田真弓編『移動と境界——越境者からみるオーストラリア』昭和堂.

———, 2024b, 「難民を翻弄するオーストラリアの境界政治——収容の海外移転・新植民地主義・新自由主義」吉原直樹・飯笹佐代子・山岡健次郎編『モビリティーズの社会学』有斐閣.

———, 2025, 「隔離・収容される庇護希望者の『当事者性』——オーストラリアの国外難民収容所からの告発とその影響」堀井里子編著『難民レジームと当事者性——「保護される客体」からの脱却』明石書店.

Khoo, Olivia, 2017, “A Post-Apology Carceral Regime: Encountering Refugee Art in Australia”, *Australian Humanities Review*, 61: 94-112.

McGregor, Elaine and Nora Ragab, 2016, *The Role of Culture and the Arts in the Integration of Refugees and Migrants*, European Expert Network on Culture and Audiovisual(EENCA), <https://eclass.upatras.gr/modules/document/file.php/PDE1357/The%20Role%20of%20Culture%20and%20the%20Arts%20in%20the%20Integration%20of%20Refugees%20and%20Migrants.pdf>.

Phillips, Kate, 2019, *An Exploration of the Role of Visual Arts Projects for Refugee Well-being*, College of Health and Social Care, University of Derby for the award of the degree of Doctor of Philosophy, <https://repository.derby.ac.uk/download/5f63051d1e3aee44c6d504838a3bd105348a5ac8c90c02df6aea1c576d65ae0d/26853818/Phillips%20K.%20Thesis%20An%20exploration%20of%20the%20role%20of%20visual%20arts%20initiatives%20for%20refugee%20well-being%20combined.pdf>.

Salmon, Jane, 2024, “Artist and Refugee Mostafa Azimitabar Paints from the Edge of a Hostile Country”, *The Saturday Paper*, July 6, 2024, <https://www.thesaturdaypaper.com.au/life/2024/07/06/artist-and->

refugee-mostafa-azimitabar.

World Health Organization (WHO), 2022, *Arts and health: Supporting the Mental Well-being of Forcibly Displaced People*, European Region, [https://cdn.who.int/media/docs/librariesprovider2/country-sites/who_arts-and-health---forcibly-displaced-people-\(final\).pdf?sfvrsn=2800af42_1&download=true](https://cdn.who.int/media/docs/librariesprovider2/country-sites/who_arts-and-health---forcibly-displaced-people-(final).pdf?sfvrsn=2800af42_1&download=true).